聞かせて先生！

失敗を恐れず、チャレンジする精神を

県立龍野北高等学校教諭　西坂 美樹さん

小学生から大学時代までずっと大好きな野球をしていたという西坂さん。「野球を教えるためにに先生になったようなものです」と笑いながら、野球だけで学生生活を終わらせてほしくはないことや、自分の意志の大切さを訴えます。

野球のようなチームプレーのスポーツは社会の縮図のような気がします。理想は個々の能力が一流で、責任を持ってそのポジションを全うすることでしょうが、実際には至難の業です。だから、上手な者が力不足の者をカバーし、全体としてチーム力をつけていくということになります。自分だけがんばってもどうにもならない時に、お互いに助け合い支え合って成果を挙げていくことの大切さは、野球に限らずいろいろな場面でいえることではないでしょうか。

私のモットーは「文武両道」です。勉強と部活動の両立は確かに苦しくて大変ですが、将来のためには絶対必要なことです。物事をわきまえ、知識を獲得し、社会に通用する人間を育てていくのが私の仕事だと思っています。さらには社会に出てからも学び続ける人間であってほしいし、自分もそうありたいと心がけています。「野球さえしていれば後は何もしなくてもいい」という考え方は、何か一つのことをしていたらそれで許されるという考え方につながっていくと思うんですよね。例えば、仕事さえしていれば家庭や地域での活動はどうでもいいというような、偏った人間にはなってほしくないです。

日々の生活の中で、「どうせ俺なんか」と自分を大事にできない生徒を見ると悲しくなります。誰にでも潜在能力はあるのですが、それを発揮するために一番大切なのは自分の意志です。でも、チャレンジできないでいるのは失敗した時に恥ずかしいとか、もっと自信をなくしてしまいそうで怖いとか思って、自分で自分の可能性を閉ざしてしまっているんでしょうね。一生懸命やって、それで失敗してもいいと考えられる生徒は必ず伸びていきます。挑戦しないから伸びないという負のサイクルを断ち切って、どこかで変えてやるのも教師の役割かもしれません。

野球では、特にピッチャーの指導に力を入れてきました。伸び悩む生徒に対してはピッチングフォームの改良など具体的な目標を設定し、それがクリアできるまでとことん付き合うようにしています。達成できないまま卒業になる場合もありますが、途中で投げ出さなかった経験はその後の人生にきっと生きると信じています。

（聞き手・七条章子）

学校探訪

一丸となり存続を願う

県立千種高等学校（宍粟市）

過疎化に伴い近年どんどん生徒が減り続け、毎年定員割れの状態が続いている。5月1日現在、1学年1学級で全校生82人。

そんな状況下で、学校存続を願う地域住民が、平成19年に「千種高校を支援する会」を発足した。今年4月から県下初の「連携型中高一貫教育校」にもなり、同じ地域の千種中学校と行事や授業の連携も強まった。地域の一体感を高めるのがねらいで、今春からの「連携型入試」により、1年生37人のうち27人が千種中出身となった。

生徒たちの存続への思いも強い。生徒会長の立道由菜さん（3年）は「登下校時や来客者へのあいさつを徹底し、地域のイベントにも積極的に参加しています。好感度を上げ、この学校に行かせたいと思ってもらいたいんです」と話す。野球部の平瀬瑛啓君、橋本誠吾君、下庄公裕君も「町の人たちに喜んでもらえるよう、地区予選を勝ち進むことが僕らの使命です」と最後の夏に向けて練習に励んでいる。

生徒会顧問の松井利澄先生は「生徒たちは、活発な活動も存続につながると信じ、いろんな企画を考えています」と評価している。そんな主体的な取り組みを、生徒みんなや地域の人に知ってもらおうと、「生徒会新聞」を月1回発行している。意見を吸い上げるための「目安箱」を置くことも決まった。

（磯本）

▲昨年の合同体育祭

綱引きで今年も日本一に

姫路市立白鳥小学校（姫路市）

12年前、姫路市で綱引選手権大会が初めて開催された。それがきっかけとなって、綱引きに熱心に取り組むようになった。当初は教師が指導を担当したが、5年ほど前からは保護者が引き継いでいる。10年連続全国大会出場。昨年も「白鳥ボンバーズ」というチームは、全日本ジュニア大会1チーム8人の総体重280kg以下の部で優勝し、「白鳥小学校といえば綱引き」という伝統に輝かしい記録を刻んだ。

今年のメンバーは5年6人、4年9人、3年5人の計20人。月曜と土曜の夜に体育館で練習を重ねている。タイヤを引っ張ったり、綱引きマシンを使ったりしてトレーニングした後、試合形式で綱を引き合う。小学生は8人1組で対戦するが、それぞれの体格に応じたポジションにつき、その位置での役割を果たすことが大切だ。負けん気や粘り強さといった精神面の強さも求められる。

主将の内海遥さん（5年）は「負けると、ものすごく悔しい。次は絶対に勝とうと練習に力が入ります。最後まであきらめないで、今年も必ず優勝します」と張り切っている。副主将の井上舞美さん（同）も「練習はしんどいけれど、勝つためにはがんばるしかない。みんなで声を出し、力を合わせて引っ張ります」と目を輝かせる。

指導者の一人、横道みゆきさんは「全国で優勝や準優勝するようになってから、自信がついて負けたくないという気持ちも強くなったようです。つらい思いは練習までで、試合では思い切りはじけて、1本の綱を通して8人の気持ちが一つになる楽しさを味わってほしいですね」と温かく見守っている。

（七条）